

## Field of Dreams

校長 武井 正明

昨日放課後、大事な試合を控えた投手陣が気になって、キャッチャーミットを手にグラウンドに出た。久々に彼らの球を受ける。

「ストレート行きます!」「次、カーブ行きます」「スライダー行きます」「ツーシーム行きます」「チェンジアップ行きます」次々と小気味よく良い球がミットに収まる。

俺のキャッチングもまだまだ捨てたもんじゃないな…悦に入りながら、俺たちの頃は真っ直ぐとカーブだけ。「変化球で逃げるな!!」なんて言われたものだ。

ふと気づいた。フォークを投げるピッチャーがいないな。

フォークと言えば、私の大好きな野茂英雄。これがすごいピッチャーだった。

今は希少価値となったワインドアップ。昔は両肘を開かずに、なんて言われたものだが、野茂のそれは全く正反対。野茂に常識は通用しない。球種などバレてもお構いなし。大きく両腕を目いっぱい上に振り上げて構える。そして上がった左脚は 270° 捻転して上半身はバックスクリーンを向く。常人ではその動き自体、真似ることは不可能。それくらいの強靱な下半身だ。

投げ込まれる球は剛球そのもの。そして決め球は伝家の宝刀、フォークボールだ。

実際に野茂を見たのは一度。東京ドームの日本ハム戦を 3 塁側から観た。

2 ストライクと追い込むと球場の全員が次はフォークと分かっている。そしてベース板のかなり前でバウンドする。しかし、打者は面白いようにクルクル三振するのだ。その日は完投で 14 個の三振を奪った。当時の先発は完投が当たり前だった。

その野茂はやがて監督との確執がきっかけで、まさに「石もて追われるごとく」海を渡る。当時、日本人選手がメジャーリーグの第一線で活躍することなど、夢のまた夢。周囲は大半が「無謀」「裏切り者」と彼を嘲笑った。

しかし、彼だけは自分自身を信じていた。そしてストで落ち込んでいたメジャーリーグを、見事「トルネード旋風」で席卷するのである。早朝、野茂の初登板をテレビ画面に祈りながら見たのを思い出す。それが今から 30 年前の今日、1995 年 5 月 2 日である。

野茂英雄の魅力は勿論その投球だが、私が最も好きだったのは、彼の敵に向かっていく、獲物を狙うような、あの眼だ。彼の一途な思いが、メジャーの重い扉をこじ開けたのだ。

4 日全軟大会の予選が始まる。一球も疎かにできない、自分自身との勝負が続く。

野茂英雄と同じ眼をした吉中ナインの雄姿をこれからも追いかけていく。